

日本学術会議で中日文化交流懇談会開かれる

一月十三日、学術会議において、昨年一月廿

八日の「ソ連・中国と学術的交流の途をひらくこと」の決議（前号に全文収録）にちどぎ、上述の会をもつた。

出席者は、龜山会長、我妻副会長、平野会員

の他、学界から倉石東大教授、幼方中研理事、

業界から布川角左エ内氏（岩波書店）田中乾郎氏（文部省）内山完造氏（内山書店）熊井氏（文部省）で、会員中研所長平野辰太郎氏が近く北京に出発する機会に、前記の決議をいかに具体化するかについて種々懇談

し、さしあたり日本学術会議が中国科
学院と学術出版物を交換したい希望を
平野会員を通じて正式に依頼すること、
これに因る日本側の業務は学術会議
を中心として学術振興会も援助すること
とに決定した。なお、この会は今後も
臨時開かれる予定である。」

中村元東大助教授の歐米

インドの視察談をきく

かねてスタンフォード大学の客員教授として招かれていた中村元東大助教授（印西尋常）が、帰途ヨーロッパ、インドを通過して帰国されたので、学会では十二月九日の懇親会に産談を中研会議室でさだした。

アメリカ、イギリス、西ドイツなどの中間

研究者の動向から、各國における華裔の生態、インドの社會などについて、非常に興味ある報告があり、ことに各地の華裔が在留日本人と異なり、いかなる場合に民族的な誇りと確信をもって生活していること、インドにおける中国の影響、たとえば漢文廟がニューヨークで中国の新しい哲学を講演し、それがイタリアの東洋研究誌にのるなど、中国の新文化がインドを仲介としてヨーロッパに影響しているなど、また、シンガポールにおける排日気分など、生々しいニュースでアジアの新しい動向を示すトピックであった。

学会掲示板

（おねがい）学会員諸氏の属される研

究機関、学会、サークルの動きを是非
この欄へ御投稿下さい。テーマや、向
題論のみでも結構です。各地の各大学
で発行の学術機関誌、あるいは研究会
サークルの機関誌、および学会報との
交換にも是非、積極的に御協力下さい。

★毛沢東三凡堅頤会誌会

毎週火曜日、日曜三時より東大中文研究室で開かれます。会場、時間などの変更が考慮されますので、新しく参加を希望されるかたは、中研内、松本、あるいは新島に連絡して下さい。テキストはプリントが用意されています。

④中国経済研究会

昨年秋の打合せで、今後の研究会は沈志遠「新民主主義経済論」（青木文庫）をテキストにし、これに当面の建設の諸相を報告として加えながら、新民主主義経済の基本法則を明らかにしてゆくこととなつた。

なお、この研究会には、ソ同盟・東欧人民民主主義諸國の研究者の参加も予定されている。

日程、一月十七日から毎月第一月曜日一時
場所、中国研究所会議室にて（連絡者中研佐藤）

魯迅研究会

-13-

依年の六月三日から、魯迅に学ぼうとする者が集つて魯迅研究会を作った。始めはかなり散漫で、ばらくに動き出したのであるが、やがて共通の道を辿り始めた。それは魯迅の姿勢に沿り、自分の生き方を正そうとする方向である。——解説をさけるために、『姿勢』というコトバを説明すれば、これは不自然な『ポーズ』のことではなく、現実への立ち向い方である。

『立場』、『世界觀』、『態度』といったコトバでも云われるが、我々はちつと動的な『迫力』をもつコトバとして、『姿勢』というのである。——自分の姿勢が悪ければ、決して魯迅をうけとめられないだけでなく、魯迅が我々とは無縁になる。魯迅を刻々によみがえらせることが、我々の研究会の目的である。

この『姿勢』を意識し始めて、研究報告、あるいは紹介を中心とするやり方から、原典に直接ぶつかって魯迅の姿勢に沿る『会読』を主に、報告、研究を從にするやり方に変えた。一人が問題提起をし、皆が一応の結論に達する迄續けるに充てた。

研究会は、毎週木曜日午後五時から神田東方

学ビルで行っているので、魯迅を学ぼうと思われる方は参加して下さい。二十二日は横濱第一号の合説会、二十九日は「魯迅と翻訳文学」の報告を予定している。なお「無花的薔薇文」終了後、「現今的新文学的概観」

（向説起者 宅見）の会読に入る。

（向説起者 宅見）の会読について

今迄の成績を、ささやかながらもまとめて一月にオ一号を発行した。

会誌は会誌の記録を主とし、研究会で発表された会員の報告を加えてある。会誌の記録は討論の一處の結論をまとめたものであり、それ以外の論文は、今後会員の討論の材料とされるものである。幸に学会員諸兄弟の批判と感想が得られることを期待する。

（会誌部より） 魯迅研究会の会誌「魯迅研究」（B5版一ハーフページ）購読希望の方には、一部につき二八円（送料とも）を添えて学会事務局まで申込んでください。お送りします。

中國近代史研究会（仮称）の発足

最近中國の歴史や、文化の研究を志す若い人々の間で、從来の分散し、孤立していた傾

向から抜け出で、共同して仕事をしていくと思われる方は参加して下さい。二十二日は横濱第一号の合説会、二十九日は「魯迅と翻訳文学」の報告を予定している。なお「無花的薔薇文」終了後、「現今的新文学的概観」

（向説起者 宅見）の会読に入る。

（向説起者 宅見）の会読について

研究会から研究会をちつと至つてある。昨年末

始めにばかりで一回しかできなかつたが、その

十二、三人の人々の真剣な討議の中にも、この会の新しい方向を感じることができる。

オ一回は十一月二十七日、中研会議室で、東大の小山正明氏が「広東綿織業について」平英

吉氏によつてものされた南京木綿の研究を受継ぎ、内外の豊富な資料を駆使しつつ、幼氏批判の上にたつて中国マニュファクチャの研究

を一步前進させるところがあつた。ここに從来推測されるにすぎなかつた広東綿織業の実態も始めから明らかにされ、外縫縫出に伴つて引起された中國綿織業の変遷の過程が具体的に分析

されたことは、大きな成果であったといわねばならない。ただ平英吉との関連については、その面での内部的分析、或は、広東近傍における農業經營の問題等が明らかにされる必要がある